

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-31

【図書紹介】『創造的進化』 アンリ・ペ
ルクソン著 合田正人、松井久 訳 筑摩書
房（ちくま学芸文庫） 二〇一〇年

松本, 力 / Matsumoto, Tsutomu

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

80

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007936>

【図書紹介】

『創造的進化』

アンリ・ベルクソン著 合田正人 松井久 訳 筑摩書房（ちくま学芸文庫） 二〇一〇年

松本 力

『創造的進化』は、そのタイトルだけから想像すれば、進化論を主題にした書物だと思われるだろう。しかし『創造的進化』で問題になっているのは進化論ではなく認識論だ。我々の認識がどのように発生し、発展してきたのかを展望することなしには認識論は語れない。生命の進化を取り上げるのはあくまでそのためなのだ。生命の進化を見ることによって、我々の認識には、本能と知性という異なる二つのものがあるということがわかる。一般的には、本能から知性への発展という単線の発達過程が想定されるが、ベルクソンは本能と知性のそれぞれが互いに独立して発展してきたと考える。ジガバチは、卵をアオムシなどに産みつけるのだが、獲物が食料として腐らないように毒を注入して麻痺させておく。昆虫学者は、ジガバチが毒を獲物に注入する場所を間違えなく特定する様子を見て、ジガバチは毒の注入場所を経験によって学習し、それが遺伝されて現在にいたったのだと想定する。しかし、たとえ太古の昔のことだとしても、蜂が何度もアオムシに毒針を刺し、

最も効率よい結果がでる場所を学習したというのは考えにくい。ジガバチとアオムシとの間になんらかの共感が存在し、この共感が、外的な知覚が教えるようなアオムシの神経系の見取り図ではなく、アオムシの傷つきやすさについての内的な認識を可能にしているのだとベルクソンは言う。そして我々のうちにも、生命に関する内的な認識、表象されるというよりも生きられる直観とでもいうべき共感が存在するとベルクソンは言うのだ。我々のうちにあるこの共感によって、知性による分解・再構築では捉え損ねてしまう意識、記憶、生命といった現象を捉え、しかも昆虫においては認識というよりはむしろ行動によって現れる共感を、知性によって照らされた明瞭な意識によって捉え直そうとするのである。『創造的進化』出版当時の時代状況や各章の概略などについては松井の解説に譲る。また、訳者あとがきにあるとおり、本訳書は文庫という体裁上、現在フランスで出版されているものには附されているアルノー・フランソワによる膨大な注が省かれている。とはいえ、事項・人名索引が巻末につけられており、『創造的進化』としては現在入手しうる最良の訳書であると言えるだろう。

原著 Henri Bergson, *L'Évolution créatrice*, 1907.